

聖書:ルカの福音書11章29~36節

説教:ヨナのしるし

はじめに

11年前のちょうどこの3月に東北の震災がありました。2年前からは新型コロナウイルスの感染が始まり、そしていまロシアがウクライナに軍事侵攻したことで多くの人たちが心を痛めています。イエスは二千年前、「この時代は悪い時代です」と言われました。そのときから世界は何が変わったのでしょうか。ますます悪い時代になってきたのではないのでしょうか。誰もがこの先どうなるのか不安をかかえています。そのせいなのでしょう、未来予測に関する本が売れていると聞きます。そんな本を読みながら、「しるし」を捜し、少しでも安心を得たいということでしょう。イエスの時代も同じでした。しかしイエスは言われます。「この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし、ヨナのしるしは別です。」どこを捜しても絶対にしるしは見つけれられない。ただしヨナのしるしだけは別である。ヨナのしるしとは何か。この不安な時代に、どこに本当のしるしがあるのか考えて参ります。

## 1 しるし

### 1) 南の女王 (第一列王記10章)

31節。「南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。」

南の女王のことはシェバの女王という名前で、第一列王記10章に書かれています。女王はソロモンの名声を伝え聞き、それが本当かどうか自分の目と耳で確かめようと、遠い距離にもかかわらずわざわざソロモンを訪ねていき、難問をもってソロモンの知恵を試したところ、ソロモンはそれにすべて明解に答える。そればかりではありません。女王が目にしたものすべてが息も止まるばかりにすばらしかったことを知り、こう告白するのです。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主はあなたを喜び、イスラエルの王座にあなたを就かせられました。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義を行わせるのです。」

女王は、「あなたの神、主」と言って、ソロモンの背後におられるイスラエルの神を見て、この

ように信仰告白します。ソロモンの知恵が一人の異邦の女性を救っていきました。

### 2) ヨナ (ヨナ書)

続いて32節。「ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし見なさい。ここにヨナにまさるものがあります。」

ヨナはあるとき神から、ニネベに行って悔い改めの説教をするようにと言われるのですが、どうしても行きたくなくてニネベとは反対の方向に逃げようとしています。ところが彼が乗った船が嵐に遭って沈みそうになり、ヨナは、嵐を鎮めるために自分が犠牲なる覚悟をして海に投げ込まれる。その結果、嵐はやみ、ヨナは大きな魚に飲み込まれて三日目に陸地に吐き出されて助かり、ニネベの町に行つて悔い改めるように叫んだ。ニネベは異邦人の町でした。それなのに町の人々は、ヨナの説教を聞いてすぐに悔い改めました。

イエスは、このように南の女王を信仰に導いたソロモンよりも、ニネベの人々を悔い改めに導いたヨナよりもまさる者としてこの時代のためにしるしとなると言われます。それはどういうとか。そのことに考える前に、33節以降にある明かりのたとえのことに触れておきます。

## 2 光

### 1) あなたの目が健やかならば

33節は後で触れることにして、まず34節を見てください。「からだの明かりは目です。あなたの目が健やかなら全身も明るくなりますが、目が悪いと、からだも暗くなります。」

私の子どもの頃、夜空の星が一つ一つはっきり見えていたのを覚えています。「あなたの目が健やかなら全身も明るくなる」とあるので、あのとき自分のからは明るかったのでしょうか。ところが、年齢とともに目は悪くなってきて、いまはくっきり見えません。「目が悪いとからだも暗くなります」とありますので、いまの私のからは暗くなってしまったのか。もちろんこれは肉の目のことではなく霊の目のことでしょうか、そういうことではなさそうです。ではどんな意味なのか。

### 2) 光り輝くのはだれ?

36節はどうでしょうか。「もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、明かりがその輝きであなたを照らすときのように、全身が光に満ちたものとなります。」

「輝きであなたを照らす」とあるので、照明に使う電球を思い浮かべるます。言うまでもないことですが、電球は内側から光ります。電球の外側から光を照らすと輝く、というのではない。そんなふうな使い方をするのは、鏡くらいしか思い浮かびません。ところが、「明かりがその輝きであなたを照らすときのように」とあって、どうも内側から輝くというよりも外側から照らされて輝くことを言っているようなのです。これはいったいどのようなことなのか。

### 3 イエス

#### 1) 光（しるし）となる

ポイントは34節の「からだの明かりは目です」にあります。順序立てて説明します。33節で明かりをともしたら燭台の上に置くのは、人々がその光を見えるようにするためでした。その明かりの光を見るのはもちろん目です。目がよければよく見えますが、目が悪ければ光がよく見えない。そこまではよいでしょう。

では光とはなにか。別に物理の話しをしようとしているのではありません。ここで言われている光は何を指しているのか。そのヒントは30節にあります。「ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。」

しるしというのは、目立つものでなければなりません。暗いところで一番目立つのは光るものです。ここでしるしとよっているのを光を言い換えてみてください。「人の子がこの時代のために、光となるからです。」光はどこに置きますか。燭台の上に置かれてそこに入って来た人が見えるようにしておく。では入って来た人全員だれもが光を見ることになるのか。というとそうではない。もし目が悪ければどんなに光が明るく輝いていても見えません。その結果、からだも暗くなってしまふ。

#### 2) からだが明るくなる、暗くなる

では、「からだが明るくなる」とか「暗くなる」というのはどんなことか。ここだけ見てもわかりにくい。実は11章はずっとつながっているのです、少しこれまでの流れを振り返ってみます。

父なる神は最も良いプレゼントとして私たちに聖霊を下さいます。聖霊をいただくことで私たち

は、イエスは救い主ですと告白できる。それが13節までのことでした。では全員が告白できるかというところではない。イエスが目の前で悪霊を追い出しても、悪霊のかしらであるベルゼブルを使って追い出しているのだと言い張って、イエスを認めようとししない人たちがいた。それが前回取り上げた話でした。

これが今日の箇所が続いています。目の前に光が輝いているのにもかかわらず、「この部屋は真っ暗だ。もっとしるしを見せろ。光などまったく見えない。はやく光を輝かせろ。」そう言っているのと同じ。ですから、34節の「目が悪いとからだも暗くなります」というのは、視力が悪いということではな。折角、救い主が光となってどんな人にも救いが見えるようにしてくださったのに、その救いの手を払いのけて、光を見ようとししない。イエスを絶対に認めようとししない人たちのことを指す。目を閉ざすわけです。

日本語に「目は心の窓」ということわざがあります。目を見ればその人の心の中がわかる、と言う意味です。それとはちょっと意味は異なりますが、ここを理解するとき、このことわざが役に立つ。目を開けば光が心の中に射し込みます。そう言う人が目が健やかな人です。けれどもそれとは反対に、目を閉じて光を見ようとししない人もいます。光は心の中に入らないのでからだも暗くなる。これが目が悪い人ということになる。そうか、目を開けて光を見ればよい。そうなります。

#### 3) 暗い部分がないなら

しかし36節のこのみことばはどうでしょう。「あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら」です。暗い部分がない人などいるのでしょうか。神の目からご覧になるなら、私たちは全員罪という暗い部分を持っている者でしょう。暗い部分を捨てましょうと欲している人があるなら、是非教えて欲しいくらいです。私たちはできません。

ではどうするか。「何の暗い部分もないなら」と、まるで自分の力で暗い部分を捨てないとダメと聞こえますが、そうではない。私の力ではない。不思議なことですが、この方が光として輝いていることを見るだけです。この方が私たちの本当の光だと認めるだけ。そうしたら私たちのうちにある暗いところ、すなわち罪をこの方は引き受けてくださるので、私たちの全身が光で満ちたものなる。その結果、暗い部分がなくなる。そういう順番です。

#### 4) 闇の中に輝くしとなる

最後に考えます。この方は闇の世に来られて私たちの光となってくださいました。その光はどこに置かれたのでしょうか。「それを穴蔵の中や升の下に置く者はいません。燭台の上に起きます。入って来た人たちに、その光が見えるようにするためです。」

この燭台とはどこのことか。おわかりですね。十字架です。入って来た人たちに光が見えるように、この方は十字架についてくださった。それがヨナのしるしだと言われます。ヨナのしるしは何をされるでしょう。光は何を照らすのか。私たちのうちにある暗闇を照らします。罪を照らします。隠していたものを明るみに出します。ニネベの人々がヨナの説教を聞いて、自分たちの罪に恥じ入り、悔い改めたのと同じように、私たちも十字架のイエスを見て恥じ入るしかない。私はあなたを十字架に追いやった罪人です。罪を犯した者ですと言うしかない。でもそのとき、この方は私たちのうちから罪を取り除き、光り輝くものにしてくださいます。自分がそんなふうに変えられているのかは、ほとんどわかりません。なぜわかりにくいのか。日本語に「灯台もと暗し」ということわざがあります。燈台は、暗い海の中で船の安全のために明かりを灯しています。けれども燈台の足もととは暗い。それに似ているのかも知れません。

この時代、人々はしるしを探しています。しかし私たちは探す必要はありません。この方が光となって私たちの内側から輝いてくださっています。すでにこの方は光となってくださる方を仰ぎ見ながら歩んで参ります。